

ちひろ美術館・東京  
美術館だより

No.168

2010.5.12



## ちひろの雨

●2010年5月12日(水)～7月11日(日)

雨が降ると、ふだん見慣れた風景がいつもと違う表情をみせはじめます。庭の草木の葉はつやつやと輝き、紫陽花やあやめの花は色を深くし、地面は水鏡となって周囲の色を映し出します(図1)。

雨の色を豊かに表現した代表的な作品に、絵本『あめのひのおるすばん』があります。雨の日に初めてひとりで留守番をする幼い女の子の、微妙な心の変化を描いたものです。「窓ガラスに絵をかく少女」(図2)では、不安な気持ちを懸命にこらえる少女の心情を、紫の潤んだ画面に重ねて表現しています。曇った窓ガラスに絵を描いたときの、しずくが水滴となって流れる様や、ガラスに押し付けた指先の冷たい感触までもが感じられる

ようです。当時ちひろは、器用に小さくまとまってしまう自分の作風に満足できず、「新しい、生き生きとした仕事がほんとうにしたい」との思いを強くしていました。『あめのひのおるすばん』では、細部の描き込みには向かない太い筆を用い、ときには立って描いたり、一度描いたものを洗い流したりと、技術的にも新たな試みに挑戦しています。水分をたっぷりと含んだ太い筆からは、湿潤でゆるやかなタッチが生まれています。

その後の、微妙な色のにじみや透けるように広がる透明水彩の特性を生かした後期の作品(表紙)では、同じような雨の情景でも、中期の作品(図1)に比べ、透明感にあふれ潤いが感じられます。

「雨あがりのふたり」(図3)では、水色と黄色の淡いにじみが、雨上がりの空気と、差し込んでくる日の光を感じさせます。後期ちひろの筆は、ぬれそぼる雨や夕立、豪雨で水かさを増した川の激流(図4)、雨あがりの日の光や空を流れる雲や風など、雨にまつわる情景を水彩のにじみを駆使してとらえています。

本展では、雨の日の子どもたちを描いた作品や、絵本『あめのひのおるすばん』『たけくらべ』『ひさの星』の原画などを展示します。晩年の病室で、窓の外の人に広重の浮世絵を重ね、口をすすぐ水に谷川のせせらぎを思うと語ったちひろ。その瑞々しい感性がとらえた、さまざまな雨をお楽しみください。(山田実穂)

## <企画展>生誕100年 赤羽末吉展 I 一絵本は舞台だ!

●2010年5月12日(水)～7月11日(日)

後援：絵本学会、こどもの本WAVE、(社)全国学校図書館協議会、(社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(社)日本図書館協会、長野県教育委員会、練馬区教育委員会、松川村  
協力：赤羽良子、赤羽研三、赤羽茂乃

赤羽末吉は50歳のときに最初の絵本を出版して以来、日本の絵本のオピニオンリーダーとして活躍し、80歳で亡くなるまでの30年間に80冊を超える絵本を発表しました。子どもの本の最高の国際賞といわれるアンデルセン賞画家賞を、日本人として最初に受賞した画家でもあります。

ちひろ美術館は、1998年に赤羽末吉の全遺作約6900点の寄贈を受け、作品の調査研究を進めてきました。そのなかには、絵本の原画の他に、制作の過程でつくられたダミーや習作、膨大なスケッチ、舞台美術の仕事なども含まれます。本展では、これまでの研究成果も踏まえ、赤羽の創意工夫に満ちた絵本づくりと、人生とを紹介します。

### 生い立ちから満州時代

赤羽末吉は、1910年に東京神田で生まれ、まだ江戸の風情の残る下町で育ちました。早くから芝居や映画に触れ、将来は舞台装置家に憧れたといえます。

1932年、22歳のときに、満州(現・中国東北部)へと渡ります。ここで運送屋や電信電話会社で働きながら、郷土文化の研究や、日本画に取り組み始めます。赤羽にとって、中国大陸の雄大な風土、長い歴史に育まれた文化は、魅力的な画題でした。1940年から3回続けて満州国美術展で特選賞を受賞し、画壇でも高い評価を受けました。

日本の軍事侵略によって成立した満州国は、1945年の日本の敗戦とともに、13年で消滅します。赤羽が妻と義母、4人の子どもを連れて引き揚げをしたのはその2年後のことです。そのときの苦難と、帰国後3人の子どもを相次いで失った悲しみは想像を絶しています。

### 絵本への取り組み

まだ戦後の混乱の続く東京で、赤羽はGHQ幕僚部の民間情報教育局(CIE)に職を見つけ、その解散後の1952年からはアメリカ大使館に勤務します。ふたりの子どもにも恵まれ、次第に生活は安定を取り戻していきました。中国大陸に長くいた赤羽にとって、久し振りに目にする日本の風土のしっとりとした美しさは、再発見でした。この湿潤な風土を追求しようと、1954年から、毎年のように東北の雪国へと旅立ち、深い雪のなかを歩いてはスケッチをしました。

そんな頃、赤羽は福音館書店の月刊絵本「こどものとも」として刊行された『セロひきのゴーシュ』を眼にします。茂田井武の絵に感動した赤羽は、自分を託すのはこの出版社だと心に決め、編集者・松居直のもとを訪ねました。「こどものとも」1961年1月号として『かさじぞう』が出版されたのは、50歳のときでした。民話を育んだ雪国の風土を、赤羽は伝統的な墨絵の技法を用いて表現しました。

1960年代、絵本を手掛ける出版社も次

第に増え、個性あふれる画家たちがさまざまな絵本を発表するなか、赤羽は日本と中国の民話の絵本を数多く発表します。当時のスケジュール帳を見ると、大使館の仕事の傍ら、たくさんの絵本や挿し絵のほかに、舞台美術の仕事まで手がけていたことがわかります。1969年に大使館を退職し、フリーになってからは、ますます精力的に絵本表現の幅を広げていきました。日本と中国大陸の風土や文化への深い造詣、物語の確かな解釈と類稀な演出力、日本の伝統的な美術を自在に取り入れた絵画表現——妥協のない絵本づくりは、歩み始めて間もない日本の絵本界に、多大な影響を与えました。

赤羽は次のように語っています。

「私は子どものものは大衆的なものだと思っている。私は両立しないといわれる大衆性と格調の高さを両立させたい。絵に深さももちたい。高さももたせたい。強さもやさしさももちたい。そうしたものをもって壮大なロマンをかきたい。そういう絵本をかいて子どもに無造作にみてもらいたい。それが私の念願である」。

時代に翻弄されながらも、自分の信じるものを追いつけて絵本にたどり着いた赤羽末吉。高い志をもって描かれた彼の絵本は、没後20年を経た現在も読み継がれ、日本の絵本の大きな礎となっています。(上島史子)



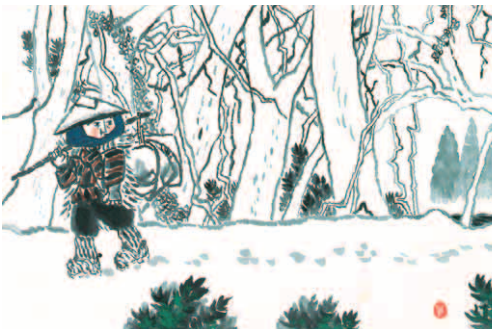
図1 「あまやどり」 1958年



図4 増水した川と泣く男の子『ひさの星』より 1972年 (岩崎書店)



図3 雨あがりのふたり 1972年

図2 窓ガラスに絵をかく少女  
『あめのひのおるすばん』より 1968年  
(至光社)『かさじぞう』表紙 1960年 (福音館書店)  
50歳のときのデビュー作。雪国の湿潤な美しさを表現しようと墨絵の技法を用いて描かれた。『だいくとおにろく』より 1962年 (福音館書店)  
赤羽は3作目のこの絵本から「絵本はみるもの」という意識を明確にもったという。カラーのページは大和絵風に、モノクロのページは墨絵で描かれた。伝統的な絵巻物から物語絵を学んだという。『スーホの白い馬』より 1967年 (福音館書店)  
モンゴルの民族楽器“馬頭琴”にまつわる少年スーホと白馬の物語。中国大陸にいたころ、雄大な内モンゴルを旅した体験が生かされた。『ほしになつたりゅうのきば』より 1976年 (福音館書店)  
中国の少数民族・苗族の民話。「壮大華麗な大ロマン」という解釈で1年間他の仕事を断ってこの絵本に取り組んだ。『そら、にげる』より 1978年 (偕成社)  
自作のナンセンス絵本。日本の春夏秋冬の風景を、豪華な歌舞伎舞台のように描き出した。『水仙月の四日』より 1969年 (福音館書店)  
宮沢賢治の雪の童話の宝石のような美しさを絵にするため、ボールペンや銀箔も用いている。

\* 7月16日から9月28日には安曇野ちひろ美術館で展示作品を入れ替え、「赤羽末吉展Ⅱ」を開催します。

## 『絵本 おとうと』原画展関連イベント

## 3月13日(土) 対談 山田洋次×松本春野「映画と絵本の『おとうと』を語る」

映画「おとうと」から生まれた『絵本 おとうと』。作家の松本春野さんは1984年生まれ、今の東京館のある場所で子ども時代を過ごしました(祖母がいわさきちひろ)。世代を超えた二人がどのようなトークを展開するのか、会場は100名余の参加者の熱気であふれました。



## □映画「おとうと」のポスター

**松本:** 山田監督の映画づくりに興味があって、撮影現場によく遊びに行っていました。映画「おとうと」を撮っていたとき、不況でアルバイト先が閉鎖になってしまい、それなら撮影現場のルポでもしようかと。スケッチをしながら文章を書いて、お持ちしたりしていたんです。  
**山田:** 現場で話題になっていたね。描かれた人たちが非常に喜んで。映画は、最初はイメージポスターというものを作る

んです。俳優の写真は使わず、イラストを使うことも多い。誰でいこうかと話していたら、スタッフから、春野さんに描いてもらったと言われて。ほくも最初に聞いたときは驚いたんだけど。

**松本:** プロデューサーの方からポスターの絵を描いてほしいと言われ、耳を疑いました。翌日脚本が届いて本当だと。あとで聞いたら、山田さんは“バクチャないんだから”とおっしゃっていたとか。その夜は眠れなくて。初めて自分が絵を描くことに責任を感じた仕事でした。

## □ぞうりを下駄に —絵本づくり—

**松本:** ポスターの絵がきっかけとなり、この子たちを主人公にした絵本を作ることになりました。最初、文章は監督に書いてもらう計画でしたが、編集者とも相談して、私のイメージで「おとうと」を絵本化することを監督に許していただきました。メールで絵を送ってご意見をうかがいながら進めたのですが、「男の子のいたずらなんて、こんなもんじゃないよ」と指摘されたり、「草履じゃなく下駄だよ」というアドバイスをいただいたり。

**山田:** 下駄にすると「音」が聞こえるだ

ろ。鼻緒が切れたり、切れたときどうするか、などとストーリーがひろがる。

**松本:** 映画の人の視点だな、と思いました。締切直前で迷いもありましたが、なるほどと思って、結局描き直したんです。



**松本:** おねえちゃんがヒーローになるこの場面は、下から見上げるように描きなさいと。逆に怒られている子を描くには、見下ろして描くんだよ、と監督に言われて。アングルによって、そんな効果が生まれるとわかって勉強になりました。

\* \* \*

「今日、映画を観たばかりだったので、余韻が残っていて一層感動的だった」「春野さん、ユーモアのセンスがたっぷりで良かった」等々、参加者からの感想がよせられました。(阿部恵)

松本春野さんHP [www.harunomatsumoto.com](http://www.harunomatsumoto.com)

## 「ポーランドの絵本画家たち」展関連イベント

## 3月27日(土) ブテンコさんのワークショップ「ブテンコさんと一緒に、絵を描こう!」

ロングセラーの絵本『しずくのぼうけん』で知られる今年79歳の絵本画家、ボフダン・ブテンコ氏が、「ポーランドの絵本画家たち」展に際し30年ぶりに来日。日本の子どもたちだけでなく、在日ポーランド人の子どもたちも参加し、ワークショップを行いました。その模様を一部紹介します。(以下敬称略)

集まったのは、20名の小学校低学年の子どもたち。「絵を描くのが難しいと思っている人は?」との質問に、手を挙げた子をホワイトボードの前に呼び、点を2つ描いたブテンコ。「これは何だろう?」と聞くと、子どもは少し考えた後、点を目にして、顔を描きました。次に、一本の線をブテンコが描き、そこから家、キリン、おむすびなどさまざまな絵を子どもたちは考えつき、描いていきました。



今度は2つの目玉を描いたブテンコ。「これは竜の目。皆で竜を描いてみよう!」と呼びかけました。一人が一本の線を描き足し、前の線を消してもいい、というルールを聞くと、最初は戸惑っていた子どもたちですが、みんなの手で、だんだん竜らしきものが姿を現しました。完成後、次はもっと上手に描けると思ったのか、「もう一度描きたい」という声も聞かれました。



「本の絵を描くときには、文をよく読まないといくともないことになります。たとえば王様を描くときに……」と言いながら、帽子をかぶり、花を持った半ズボンの子を描いたブテンコ。「これは王様かな?」「違う!」「じゃあ、どうしたら王様になるか変えてみよう」と提案。帽子が王冠になったり、マントを描いたり、だんだん王様らしくなりました。

ワークショップの最後は、配られたプリントの絵を完成させるというもの。白紙の右上には、ブテンコが50年以上前から描いている男の子、ガビションがいます。お花や家を描く子、スキー板を描く子、椅子を描く子……。



できあがった絵は集められ、子どもたちは描かれたものの中から一番良いと思うものを多数決で決め、最優秀賞を選びました。最後に全員がキャンディーをもらい、工夫と発見に満ちた1時間はあっという間に過ぎていきました。

数々の国で子どもたちとのワークショップを行ってきたブテンコが、日本でのワークショップを終え、「子どもたちは、国が違っても、どこでも皆同じです」と語っていたのが印象的でした。絵のもつ力も、同様に国を超えると実感したワークショップでした。(松方路子)

## ひとこと ふたこと みこと



### 〈ちひろと金子みすゞ展〉

3月7日(日)

ちひろとみすゞ、二人とも大好きでしたが、こんなにも二人の作品がそのまま並べてじっくりいくとは知りませんでした。本当に、小さなものへの愛と慈しみがあふれていますね。今の時代からこぼれ落ちてしまいそうな感性。大事にしたいです。(愛知県 Y・S)

3月17日(水)

私は今3年生で、もうすぐ4年生になります。3年生の国語の授業で「おにたのぼうし」をやりました。その絵がいわさきちひろさんとしてお母さんが「金子みすゞの詩といわさきちひろさんの絵をかざっているところがあるんだって」と言いました。きょうみをもって来たらおもしろかったです。

3月26日(金)

もうすぐあかちゃんがうまれるので、さつきみたえ(犬)を、またきて、あかちゃんにもみせたいです。(いとうれいこ 5さい)

### 〈ポーランドの絵本画家たち展〉

3月4日(木)

ユゼフ・ヴィルコンのクジャクの絵に惹きつけられ、展示の絵とその下にある絵本をじっくりと見ました。幻想的な色彩と構成にすっかりとりこになりました。『すきすきだいすき』は、私の孫に贈ろうと思います。(目白台 金元武光)

3月9日(火)

ポーランドには2006年7月に初めて旅行しましたが、今回の展示のような絵本作家たちの存在や作品は、まったく知りませんでした。当時はアウシュビッツやショパン

に大変関心がありましたが、この展示で改めてポーランドに強い関心をもつようになりました。作品では、「火事だ!」や「しずく」が大好きです。(東京都 33歳男)

3月10日(水)

私の生まれた北国の世界につながる様子里に引き込まれます。ケースの引き出しを開けるときも、おもちゃ箱を出しているようなときめきがあります。(埼玉県 60歳女)

### 〈「絵本おとうと」原画展〉

3月12日(金)

おねえちゃんと、おとうとの、きずながわかる絵でした。とても、たのしそうな絵です。この絵をかいている方は、ちひろさんのように、たのしみながらかいているでしょう。また来たいと思います。(UTSUMI Sumire)

## 美術館 日記



2月9日(火) ☁️ 🌂

ちひろ美術館の今年の活動テーマのひとつは「平和」。その一環で、広島への一泊二日の研修旅行を企画する。原爆資料館では、解説ボランティアや被爆者の方のお話をうかがう機会を得た。ちひろが『わたしがちいさかったときに』の取材で広島を訪れたのは、もう40年以上も前のこと。思いを受け継ぎ、未来へつなぐ使命感で身の引き締まる思いだ。

3月5日(金) ☀️

隣の杉並区から、幼稚園の卒園遠足で年長組の57名の子どもたちが先生と一緒に来館。金子みすゞの童謡とちひろ作品を紹介すると、大きくうなずいたり、隣同士で耳打ちしてクスクス笑ったり。まるでちひろの絵のよう。

3月7日(日) ☁️

昨夜の「アド街ック天国」(テレビ東京)で上井草が放映され、ちひろ美術館が第3位にランキングされた。開館前からお客様が並び、TVの広報効果を実感。

3月13日(土) ☀️

対談「おとうと」開催(p.4参照)。若い人たちにも見てもらいたいと、Ustreamでの配信のほか横浜のカフェで対談をライブ中継すると、あわせて100名が視聴。ツイッターでは260名以上のフォロワーが。美術館にとって初めての試みに、理事長の山田洋次監督と評議員の高畑勲さんも興味津々。

3月15日(月) ☁️

カフェに新しいコーヒーマシンがお目見え。おいしいドリップ式のコーヒーが落とせるように、試飲を重ねて選び抜いた。季候の良くなる4月以降には、テラスのテー

ブルも新調し、昨年好評だったガーデン・カフェも再び展開。

3月18日(木) ☀️

雑誌「和楽」が赤羽末吉展を取材。生誕100年記念となる本展では、代表作だけでなく、未公開だった膨大な取材・調査の資料も掘り起こし、絵本界の演出家と呼ばれた赤羽の全画業にせまる。そのほか、「MOE」「母の友」などの雑誌でも特集が生まれ、20年ぶりの画集の制作も進行中。

4月4日(日) ☁️

太田治子さん講演会「ちひろとみすゞ」開催。深い考察に心を奪われ、1時間が瞬く間に過ぎた。思いがけず、みすゞのご息女・上村ふさえさんが参加され、「人生のなかでこんなに楽しい日はなかった」とのおことばをいただく。詳細は、次号で紹介予定。

## 窓

### 子どもころ出会ったちひろさん

松本由理子(ちひろ美術館・東京 副館長)

生前のちひろを知る方々の証言を後世に伝えたいと、30代の映像作家・海南友子さんに30人の方を取材していただいた。

敗戦から3年目の1948年頃、神田のブリキ屋の2階で絵を描いていたちひろを語る当時6歳、10歳、11歳だった3姉妹のお話、ちひろの原点を見る思いだった。

「ものがなくてあの頃は、食べるものも。そんな時代に髪の毛が真っ黒でおかっぱさんで色が白くて、『綺麗な大人だな』『素敵な女性だな』と思いました」「部屋に画材がいっぱいあって、子どもだからあれこれ出すと、すぐに紙をくださって描かして

下さる。『ダメ』というのを聞いたことがない。何でも、『いいのよ』って。なんて優しい人なんだろうと思いました」「私たちは母子家庭でした。5人兄弟で。母が仕事をしていたて昼間はいい。あの頃はお父さんを戦争で亡くした子どもがたくさんいました。あそこは、ほんわり心が温まるような場所。

(ちひろさんは)つぼみのように心の中に膨らむようなものを持っていらして、そういう話をしてくださる。狭いけれど、楽しい空間。お花がいつもいっぱいあって。花の香りがして。『バレエをやりたいとか、絵を描きたいとか、もっとお勉強したいと

か、そういうことを思ったときに、やりたいことができる世の中にならなると。そういう世の中にしていこうという、とっても高い理想というか夢をお持ちだった」「人はみな平等よ、とか、平和が大事とか。本当に戦争はいけない、ということは、繰り返し繰り返し、お話されていました」

70を過ぎた姉妹の中に、今なお鮮明に生き続けるちひろ。「『戦火のなかの子どもたち』の母親の絵を見たとき、母にすごく似ているなど。母も女手一つで5人育てた人でした」との言葉に、ちひろの中でも生き続けていたこの家族との時間を実感した。

●次回展示予定 7月14日(水)～9月12日(日)

ちひろ・51歳の挑戦

1970年、51歳のちひろは、パステルという新しい画材に挑戦します。絵本『となりにきたこ』などのパステルで描いた作品と、その後の水彩作品を展示し、パステルへの挑戦がちひろの画風にもたらした変化を探ります。



ピンクのワンピースを着た少女 1970年

<企画展>ちひろ美術館コレクション展  
素材であそぶ

ちひろ美術館は、世界31カ国196人の画家による約17100点の作品(2009年11月現在)を収蔵しています。個性豊かな世界各国の絵本画家たちの画材や技法に注目し、創作の秘密にせまります。



クラウディア・レニャツィ(アルゼンチン)『わたしの家』より 2001年

ちひろ美術館・東京イベント予定

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。  
ちひろ美術館のHPからもお申込みできます。 <http://www.chihiro.jp/>

TEL.03-3995-0612 E-mail [chihiro@gol.com](mailto:chihiro@gol.com)

●「赤羽末吉展」関連イベント

講演「赤羽末吉の人生」

赤羽家の嫁として、日々の暮らしや制作のようすを目にし、膨大な作品や資料の整理にも携わってきた茂乃さんが、赤羽末吉の波乱に富んだ人生について語ります。

- 日 時：5月29日(土) 17:00～18:30
- 会 場：図書室
- 定 員：50名
- 講 師：赤羽茂乃
- 参加費：700円 ※入館料別
- 要申込み 4月28日(水)より申込み受付開始



●「赤羽末吉展」関連イベント

連続講座「赤羽末吉・絵本づくりの舞台裏」

物語の舞台となる風土や文化を熱心に研究し、演出のために創意工夫を凝らした赤羽末吉。絵本制作の舞台裏を、3回にわけて資料を見せながらご紹介します。

- 日 時：時間はいずれも17:15～18:15
- I. 6月5日(土)『かさじぞう』『つるによぼう』  
—雪国を訪ねて—  
4月28日(水)より申込み受付開始
- II. 6月19日(土)『スーホの白い馬』  
—赤羽の見た中国の大地—  
5月19日(水)より申込み受付開始
- III. 7月3日(土)『ほしになつたりゅうのきば』  
—赤羽流！絵本づくりの奥義—  
6月3日(木)より申込み受付開始

- 会 場：図書室
- 定 員：各20名
- 参加費：各500円 ※入館料別

●わらべうたあそび

声を出して歌ったり、体を動かしたりしながら、親子で楽しく参加できます。0～2歳までの乳幼児と保護者対象。

- 日 時：6月5日(土) 11:00～11:40
- 会 場：図書室
- 定 員：15組30名
- 講 師：服部雅子
- 要申込み、参加費無料(入館料のみ)  
4月28日(水)より申込み受付開始



●新刊案内

『画集 赤羽末吉の絵本』

展覧会にあわせて、赤羽末吉の生誕100年を記念した絵本画集が刊行されます。絵本56作品の原画と、未完となった作品も収録。他に資料も多数収録し、その作家像に迫ります。絵巻に描いた中国郷土玩具の口絵付。

- 5月上旬発売
- 定価：2800円(税別)
- 発行：講談社



●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14:00より展示室にて、作品の解説や展示のみのところなどをお話します(参加自由)。

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11:00より展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせなどをおこないます。(参加自由) \*授乳室もご利用になれます。

●他館での展示スケジュール

- <ちひろ展>  
ひろしま美術館(広島) 7月24日(土)～8月29日(日)
- <コレクション展>  
松本市美術館(長野) 10月9日(土)～11月28日(日)

CONTENTS

- <展示紹介> ちひろの雨 / <企画展> 生誕100年 赤羽末吉展 I —絵本は舞台だ！— …… ②③
- <活動報告> 対談 山田洋次×松本春野「映画と絵本の『おとうと』を語る」 / プテンコさんのワークショップ… ④
- ひとことふたことみこと / 美術館日記 / 窓… ⑤

美術館だより No.168 発行2010年5月12日